

宮武辰夫の幼児美術教育方法論

大須賀隆子

本論文は、宮武辰夫（1892－1960）の幼児美術教育方法論について考察するものである。彼は、1950年代の日本の幼児美術教育界において、イギリスの硬化した写実本位の図画教育を自由で創造的な美術教育へと転換させた美術教育家トムリンソンに比せられる仕事をしたといわれる。

1950年代の日本の教育は、戦前の国家中心主義の教育から、個性や創造性を育てる教育に大きく転換した。しかし、幼児美術教育の場面では、指導方法が分からず、戦前までの模倣中心で、型にはめ込む美術教育が行われていた。そうした実態に対して、子どもの生活や遊びのなかから表現が生れる美術教育へと変革をもたらしたといわれるのが宮武である。彼は、おとなからの教え込みや型の模倣をさせなくても、子どもは、創造性を＜生きもの＞の本能のように内在させている存在であると考えた。そして、1歳前後から始まるスクリブル（いじくり・なぐり描き・こねくり・ぬたくり）を、生得的本能であり、創造的なアーティストィック・プロセスの始まりであると考えた。そうした前提のもと、＜生きもの＞の土台である身体全体で遊びながら、つまり、「外界と相互交渉（＝スクリブル）」しながら、描いたり作ったりする幼児美術教育方法論＜全身のスクリブル＞を、宮武は創出した。＜全身のスクリブル＞によって、子ども自身の感覚や感情が活性化され、子ども自身の生活や遊びとの連続性と必然性をもった表現が生れるような幼児美術教育を実践したのである。

上記結論に至るまでの第1章から第4章までの考察の結果は以下の通りである。

第1章で、宮武の戦前と戦後を貫く美術教育思想には、＜生きもの＞思想があることを明らかにした。彼は、1915年に東京美術学校西洋画科を卒業すると、「野獣的な原始美」を求めて、原始芸術探検の旅に出た。最終的に宮武は、幼児美術教育の集大成として、1959年に巨大遊具《シャトレー》を設計して、それを＜白い生きもの＞と呼んだ。全身の流動とダイナミズムが生成され、子どもの内なる＜生きもの＞性が発揮され、無形の具象が脳心（＝心身）に蓄積されていくことが、造形創造の源流になると考えたのである。

第2章で、宮武の幼児美術教育方法論の背景理論となるルース・ショウのフィンガー・ペインティング、グレッツィンゲルのスクリブル論、フローレンス・ケインのスクリブル運動論について考察した。いずれも＜生きもの＞のように両手両脚全身を使って、スクリブルを起点（基点）とする描画法を提唱している。グレッツィンゲルは、幼児のスクリブルを、その身体が母親の胎内で「水棲動物」であった時の記憶、胎内から出て陸上動物に生まれ変わった瞬間の衝撃、それ以降の「外界との相互交渉」における両手両脚全身を通しての記憶の軌跡であると説いた。そして、ルース・ショウとケインの美術教育は精神衛生（精神分析）的な視点を活かした無意識領域からの表現を促す実践であることを明らかにした。

第3章で、宮武の幼児美術教育方法論の成立過程と事例を考察した。1957年前後に、宮

武は、子どもの生得的な創造性を育てる美術教育であるべきかという理念論は出尽くし、どう育てればよいかという具体的方法論を求める時期に入ったととらえた。彼は、ショウのフィンガー・ペインティングの特質を活かして、子どもが量感のある素材（粘土）を全身でこねくる（ニイディングする、スクリブルする）過程のなかで、＜生きもの＞性が発揮されてきて、子どもの内からイメージが生成され形（表現）が生れてくる粘土工作を実践した。さらに、型の模倣に陥った子どもの絵を救うための方法論＜全身のスクリブル＞を創出した。1歳前後のスクリブルから出直す5歳児事例や、興味関心（＝子どもの必然性）のあることに全身で取り組む事例から、子どもの＜生きもの＞性である感覚や感情が蘇ってきて命の通った絵が生成されていったことを明らかにした。以上のような生得的な創造性を育てる具体的方法論を実践するにあたって、宮武は、1950年代の子どもたちの心身が、子どもの発達段階や心理を理解しないおとな達の価値観や躰によって抑圧されていたことを見出して、幼児美術教育に精神分析的視点を導入して解放していったのである。

第4章では、『児童画評価シリーズ1』を取りあげた。同書は、1950年代後半に感覚・感情主義派の宮武と認識主義派の間で顕著になった、児童画をめぐる混乱を受けて企画された。その結果、混乱を打開する方向性を二つ見出すことができた。第1は、幼児の成育歴と合わせて幼児画の評価を試みることであった。第2は、主義主張が異なっても、よいと評価される児童画は、始めに興味関心という感情的な意欲や契機があり、子どもの感情が表現したい対象に生き生きと結ばれていることが、表現の始まりであるという共通理解であった。

宮武の幼児美術教育方法論＜全身のスクリブル＞の意義は、日本の幼児美術教育を幼児の生活と遊びに結びつけた点にある。幼児の遊びは絶えず動的に発展するのに、遊びを絵にすると静止するのは、おとなからの教え込みや型の模倣によると宮武は考えた。そこで、＜生きもの＞的なスクリブルから出直して、描画の発達段階を踏むことによって、幼児自身が吸収したものを幼児自身が取出す造形表現へと導いていった。その際に、幼児の＜生きもの＞性が宿る身体が動いていなければならない。幼児の身体が最もよく動くのは、遊んでいる時である。かくして従来の幼児美術教育を打破するために、幼児の身体が動いている遊びの連続性としての絵や工作を実践するに至ったのである。その一連の過程を、宮武は＜全身のスクリブル＞とした。

1950年代の子どもたちは、その発達段階や心理に無理解であったおとなたちによって抑圧されていたために、＜生きもの＞の本能のように無意識領域に内在していた創造性の発揮が困難であった。その抑圧から少しでも子どもたちを解放するために、宮武は子どもの絵と成育歴を合わせた幼児画展を開いたが、その現代的意義に迫るのは今後の課題である。